

## 手編みした円筒状の毛糸ニット

## 「認知症マフ」手を入れてほっこり



「認知症マフ」作りに励むボランティア。一つ一つ動物や野菜をモチーフにしたかわいいアクセサリーが縫い付けられている。岐阜市島新町、つくろん

手編みされた円筒状の毛糸ニット「認知症マフ」。認知症患者らが触ったり、中に手を入れたりすると安心感が得られ、コミュニケーションを促す効果があるとされている。県内でも医療・福祉の現場で活用が広がっている。(田代理加)

5月、中濃厚生病院(関市若草通)にボランティア有志によって手作りされた複数の「認知症マフ」が届いた。90代の女性入院患者は、表面に動物のアクセサリーが縫い込まれたマフを手にとった。「これは猫? かわいい。ひ孫が動物好きだから早く見せたい」「昔は家族のセーターなどを自分で編んだわ。マフに両手を通すと、家族の話や昔の懐かしい暮らしがふったり、首に巻き付いたりして効果を実感する。」

認知症マフは、長さ約30センチ、直径約15センチの円筒状。頭からかぶったり、首に巻き付いたりして

### 県内福祉現場など活用

### 奉仕で制作「患者の喜び 励み」



認知症マフに両手を通しながら、話をする入院患者。関市若草通、中濃厚生病院

ないよう安全性に配慮した規格。手を入れると、真ん中に握りやすい毛糸の玉が縫い付けられている。表面には花や野菜などをモチーフにした毛糸製のアクセサリーも付いている。英国発祥で、5年ほど前から日本でも注目されるようになった。

岐阜聖徳学園大看護学部教員の山内友宏さんは「手からの心地よい刺激が心身の緊張を和らげるとされている」として、県内で普及を進めている。認知症の人だけでなく「介護が必要な高齢者や障害のある子どもにも有効」と、活用の広がりを示す。

さらに、身体拘束の機会を減らし、スムーズな介助につながることも期待されている。医療や介護の現場では、血圧を測ったり、体勢を変えたりする際、

怖がった患者が介助者の腕をつかんで離さないケースもある。山添看護師は「マフを胸に抱くことでそういう不安を和らげる効果もある」と語る。

手編みで色もデザインも一つ一つ違う認知症マフ。地域ではマフ作りボランティアの輪も広がっている。5月上旬、「ひだまり創」が運営する岐阜市の施設「つくろん」でマフ作りカフェが開かれた。

集まったのは60〜90代の住民有志約10人。かぎ針を使って毛糸を手際よく編み込んでいく。「その色の組み合わせ、かわいい」「アクセサリーはイチゴにしようか」。互いの「作品」を見せ合ったり、編み方を教え合ったり、月2回のカフェは地域の交流サロンにもなっている。

共通するのは「使う人が笑顔になってほしい」との思い。参加者の70代女性は「これまでは編み物を作っても自分で満足するだけだった。誰かが喜んでくれることがうれしくてどんどん手が進む」と笑顔を見せた。

完成したマフは市内外の病院や福祉施設に贈られる。古澤由加里理事長は「誰かが待っている、使ってくれているということが作り手のモチベーションになっている」と話す。一つ一つに作り手の思いが編み込まれた認知症マフ。利用者に、人のぬくもりも届けている。